

生死ぎりぎりの処にある西郷。

ここでも助け舟が現れる。
監視役の土持政照であった。

彼は、役人のあるべき姿、考え方を著した西郷の著作「与人役大躰」に感じいていた。

西郷は常々土持に言っていた。

**「天は、自ら万民の世話を出来ないから天子を立て、
天子も自分だけではできないから、
諸侯に命じて人民を安堵させようとする。
諸侯も同じく、有司に命じる。**

**その全ては万民の為であるから、
役人は万民の涙苦を自分の涙苦とし、
万民の歓楽を歓楽とし、日々天意に背かず、
報いるところがあるべきで、
この天意に背けば天罰が降るはずである。
万民の心が即ち天の心であり、
民心を一つにして立てるのが天意に従うということだ。」**

原始的な言い様ではあるが、その内容は為政の本源についてはいまいか。
土持は、日々衰えていく西郷の疲弊を見かねて副食物の差し入れや牢外への散歩などを促すが

「規則どおりせぬと貴方に迷惑がかかる」と言い、その好意を受けようとしなかった。

西郷をどう救うか……。

考え抜いた土持は、野外牢監禁を拡大解釈し、
私費をもって雨露を凌げる座敷牢を建造、西郷をそこに移してしまっている。

命に別状のない場所を得た西郷は、

そこで、四書五経をはじめ朱子学、陽明学系統のものから
莊子や韓非子まで、和漢の道德、政治に関する書を中心に、
熱心に勉学したと言われている。